



表現教育研究グループ
人形劇「ドロシーと愉快的仲間たち」より

現代教育研究所

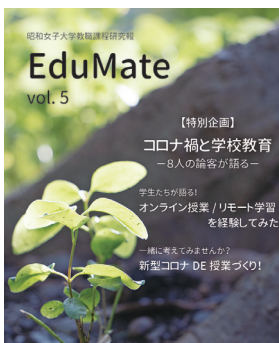
所長あいさつ 現代教育研究所所長 友野清文

昭和女子大学現代教育研究所は2014年11月に、押谷由夫先生のご尽力により、本学の6番目の研究所として発足しました。それから6年余り経過し、所員(大学教員)と研究員(学内外からの公募等)の協働により、様々な活動を進めてきました。

この1年間はコロナ禍の影響で、活動内容・方法の制限や変更を余儀なくされましたが、研究活動自体は止まることなく進めてきました。その成果の一端はこのニュースレターで紹介されていますが、より詳しくは研究所紀要や各種の資料をご覧ください。

次年度以降は、これまでの成果と蓄積を踏まえた上で、現代の教育課題に一層柔軟に・機動的に取り組むことができるような体制づくりを行います。そして、大学内外の様々な個人・団体組織との連携も深めていきます。今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

発行物案内 GROUP ACTIVITY REPORT



教育課題研究グループ
『EduMate vol.5』：
昭和女子大学教職課程研究報

【特別企画】
コロナ禍と学校教育
—8人の論客が語る—

学生たちが語る！
オンライン授業／リモート学習を
経験してみた

一緒に考えてみませんか？
新型コロナDE授業づくり！



昭和女子大現代教育研究所
紀要第6号

本書の内容

保育者と乳幼児の相互作用の評価における意図の役割に関する一考察
.....佐々木 郁子
日本の学校教育史における感染症と幼児教育.....熊田 凡子
若者の文化財保護に対する意識に関する研究.....森屋 雅幸

[研究ノート] 5本
[実践報告] 3本

ご希望の方は研究所までお問い合わせください

コア・プロジェクト REPORT OF CORE PROJECT

Co-Creative Learning Session in SHOWA 2020

現代教育研究所がおくる昭和女子大学附属中学校・高等学校×昭和女子大学のコラボ・プロジェクト「Co-Creative Learning Session2020」、今年のトピックは「水」。【水と生きる～今私たちができること】をテーマに、コクリクルー（中学生13名、高校生15名）との冒険がスタート。キックオフは「わたしと水、思い出博覧会へようこそ!」。水にまつわる思い出を一人一人が語ります。水道トラブルの一日・水がつかめるキット・軽井沢のクレソン・屋久島研修・多摩川いかだ下りetc…。生活と深く結びついている「水」に気づいた後に、「今、関心ある水のこと」をグループディスカッション。水のヒーリング効果・生活排水は一体どこへ?料理にフィットする水の種類・水分補給とカラダの関係etc…。メンバーの「水」センサーの鋭さにジェネレーター緩利と青木はワクワクです。

続くミッションは「ニュースショーづくり」。水ジャーナリスト橋本淳司さんの記事をもとに制作した「ニュースショー」。そのラインナップをご紹介します。「コロナ感染と水問題」「生物多様性と水マネジメント」「ここが違う、ペットボトルと水道水」「もし下水道が損壊したら」「水道料金と水道管」。キャスター・インタビュー・専門家になりきることで「水をめぐる物語」へのモチベーションはアップです。

総合的な学習/探究の時間(火曜日5・6限)を使って、プロジェクトのラフアイデアを詰めていく生徒たち。コロナ禍で専門家によるスペシャルセッションはなくなったものの、橋本さんからの動画コメントで刺激を受けたメンバーたちに、コクリ・ジェネレーターは、探究旅支度6つの条件を語ります。①身近さ、②切実さ、③オリジナリティ、④価値、⑤インパクト、⑥実現可能性のレクチャー。ゴール設定は今のままでよいか、文献・資料のリサーチはどこまで進んでいるか、実験・調査はどのように進めていくか。

プロジェクトデザインの後には、調査・実験と動き出し、考察・再調査・再実験を繰り返しながら、探究の冒険は

ゴールを目指し進みます。すべてのグループが苦戦したのが「アンケート調査の設計」。必要な情報は何か?どのように聞くか?アンケートの「質問づくり」を通し、ロジカル思考が鍛えられるメンバーたち。集計後はジェネレーター緩利から「分析方法」を教わり、アンケート調査のエッセンス「考察」に挑戦です。「価値ある分析・考察を可能とするためには、調査設計がいかに重要か痛感しました」と語るメンバーたち。冒険を伴走するコクリ・ジェネレーターは常に問い続けます。「そこに愛はあるか?」「誰に届けたいのか?」「誰と/どことつながればいいのか?」「そこにオリジナリティはあるか?」「根拠はリアル、かつ確かで豊か?」最後のプレゼンに向けて、各チームは考えます。「水をめぐる冒険、わかりやすく・おもしろく。そのためにはどんなストーリーにすべきか?」と。

ついに迎えたコクリ・プレゼンショータイム(1月23日)。ラインナップの紹介です。

- 1: 料理と水のふかーい関係～おいしい水ってなあに?～
- 2: 水とお肌の関係～どれだけ飲むと美肌になれる?～
- 3: デトックスウォーターの効果を探る
～もしかして疑似科学?～
- 4: STOP かくれ脱水!
～カラダと水分、良い関係って?～
- 5: サバイバル時の飲み水づくり
～雨水・池水飲めるかな?～
- 6: 癒しの水音をもとめて
～水の音のヒーリング効果って?～

教師: エキシビジョン

銭湯物語 Get' 湯 Let' 湯 I want 湯

「飲む水、聞く水、水の世界は深かった」「人と水のふかーい関係、もっともっと知りたくなった」。生徒たちの言葉は、「ポップでディープな学び」を目指した私たちに喜ばせ、次の冒険へと駆り立てるのです。(文責: 青木)



ストレスの 斬新な解消法!

11月16日実施
昭和高校5年S組で実施
合計29人が回答

好きな水の音(場所)

BEAT3	WORST3
1 川のせせらぎ	1 トイレの音
2 海の波の音	2 ダムの放水音
3 波の打ち寄せる音	3 水道水の音

※当社調べ

グループ活動報告: GROUP ACTIVITY REPORT

表現教育研究グループ

表現教育グループ2020年度の活動は、プロジェクト研究「表現教育による〈深い学び〉の検証」の完成年度を迎え、集大成としてのパフォーマンス・アーツの制作上演を計画していましたが、コロナ禍の影響で秋の大学祭でのライブ上演ができなくなったため、当初の予定を変更して動画作品を制作し、「オンライン秋桜祭2020」で公開・配信しました。

制作メンバーは、研究所所員の木間、早川、永岡とそのゼミ学生14名、久米研究員、河内研究員、世田谷学園中学校・高等学校の美術部員です。対面での打ち合わせができない中、Zoomで協議を重ね、学生たちの希望で一昨年上演した「ドロシーと愉快な仲間たち」(原作「オズの魔法使い」)を子ども向けの人形劇としてリメイクすることにしました。

まず学生たちを「声優チーム」「美術チーム」「音楽チーム」「動画編集チーム」の4班に分け、週1回の合同ゼミで綿密なコミュニケーションをとりつつ、7月から制作に入りました。脚本・演出担当の久米が前回の台本をリライトし、美術担当の早川と河内が人形と舞台装置の製作を指導しました。原作では子犬だったトトが大きな日本犬になるなど、愛すべきキャラクターが揃いました。また、声優チームも将来プロの俳優

優を目指すAさんを中心に全員が久米の特訓を受け、音楽チームも木間、永岡の指導の下、主題歌、効果音、BGMを自分たちで制作・収録してデジタル音源化しました。動画編集にはiMovieを用い、まず台本を細かくカット割りして人形たちの動きを短い動画に撮影し、その映像に合わせて声優チームがナレーションとセリフを収録、さらに音楽音響のデータを重ねて微調整を繰り返し、動画を完成しました。

動画の公開・配信にあたっては、人形劇だけでなく、各チームの制作秘話や学生コメント、制作した人形や楽曲も紹介したかったので、Matterport Cloudを利用しました。大学祭HPの指定のURLをクリックすると、360度カメラで撮影した記念講堂の客席・ステージのパノラマ画像が現われ、その中のアクセスポイントをクリックすると、動画や写真、音楽、文章に飛びという仕掛けです。11月21日の公開日から反響を呼び、交流のある館山市教育委員会が市内の小学校に配信した他、海外からのコメントも受け取るなど、これまでにない手応えを感じることができました。制作の詳細については、後日、論文や冊子の成果物としてまとめる予定です。(文責:永岡)

企画公開講座 「仕事をやめたくなくなったとき

—新人保育者がぶつかる困難をどう乗り越えるか—

乳幼児教育研究グループでは、就職して1年目～3年目の保育者を対象とした、オンラインによる公開講座を開催しました。女性の社会進出に伴う保育需要の急増は「待機児童」問題として大きく取り上げられていますが、この問題の解決には「保育士不足」の解消が必須です。慢性的な保育士不足の原因には、保育者の勤続年数が短いことがあげられ、せっかく養成校での専門教育を受けて就職しても、半数以上の方が勤続年数8年未満で離職してしまうという現状です。

仕事を続けるモチベーションを支えるのは「給料」、「やりがい」、「人間関係」と言われますが、保育者の待遇については徐々に改善しつつあるものの、「やりがい」を感じられるようになる前に「人間関係」に嫌気がさしたり、多岐にわたる仕事を抱えて自信を無くしてしまったりして、退職を考える新人保育者も後を絶ちません。今回パネリストとして体験を語ってくれたのは、私立こども園保育教諭Aさん(就職4年目)、私立保育所保育士Bさん(就職5年目)、公立保育所保育士Cさん(就職4年目)の3人の保育者です。助言者は、渋谷区社会福祉事業団保育士支援アドバイザー松井由紀先生と、昭和女子大学初等教育学科特命教授木村英美先生にお願いしました。

一般からの参加者20名で、パネリストの発表と助言を聞いた後は、Zoomのブレイクアウト機能を使っ

私が仕事を辞めたくなくなった時

5歳をもった3年目
毎日が地獄で辞めなくなった

- 要因①難しい子どもたち
②癖の強い先生たち
③自分の性格



たグループワークで、それぞれの体験を共有しました。

3人のパネリストの悩みは、保育の質と長時間保育の両立を強いられ、家に持ち帰らなければ終わらない仕事に振り回される日常や、支援の必要な子どもを複数担当しながら、ペア組んだ保育者からは保育をことごとく否定されてストレスから体調を崩してしまった体験など、いずれも想像をはるかに超える過酷な保育現場の様子が目に浮かぶものでした。そして、そのような状況を何とか乗り切って続けられたのは、子どもたちの成長を感じられるこの仕事の喜びと、頑張りを認めてくれた上司や同僚の存在。そして、いかに気分転換を上手にできるかがポイントのようです。「時には逃げることも必要」と言う助言者の一言にホッとすると同時に、急増する保育需要を満たすことにはばかり目が行き、新人保育者を丁寧に育てるゆとりが今の保育現場には無いことに危機感が募りました。(文責:石井)

乳幼児教育研究グループ

グループ活動報告: GROUP ACTIVITY REPORT

公開セミナーに向けた勉強会 (2021年1月11日)

私学教育研究グループは、2019年8月に「教員育成セミナー ～対話する学校～」を実施し、これからの学校教育の課題を踏まえた新しい教員研修のあり方の模索を始めました。そして本年度以降セミナーを定例化することとしていました。

しかしながら新型コロナ感染拡大のため、第2回セミナーの日程や開催方式を決めることがなかなかできませんでした。グループで何度も話し合った結果、年度内に実施することとし、その日程を1月11日(13時～16時)としました。当初は昨年度と同様、研究所全体の「オープンラボ」として「公開セミナー」を行う予定でした。同時にオンラインではなく、是非実際に集ってじっくりと話し合いをしたいと考え、対面での開催にこだわりました。

ただ状況が厳しくなったことから「公開」とはせず、グループのメンバーを中心とした勉強会とし、今後のセミナーに結びつける場として設定することとしました。当日は、昨年度から関わって下さっている奈良女子大学附属中等教育学校の神徳圭二先生、本グループの研究員の先生等5名がZoomで参加、本学の昨年度の卒業生で私学教員をしている2名、所員2名の4名が研究所に集まり、合わせて9名で行いました。

まず神徳先生から、セミナーに向けての課題についての問題提起がありました。探究的な学びや開かれた

学校を実現するために学校と教員に何が求められるのか、「持続可能な」教員研修はどうあればよいのか、そしてそもそも学校・教員の役割とは何なのか、といった点が指摘されました。

その後は参加者が自由に、学校や授業の状況とその中での考え・思いを話しました。とりわけ授業については、オンライン化を巡る取り組みや課題が共通の問題として出されました。教員育成の面では、「(「コロナ」以前から)学校での「技の伝達」や「先輩からの指導」の場が少なくなっているのではないかと指摘がありました。さらに「社会からの要請に応える学校」「教育のICT化」についても、それが本当に無条件で望ましいのかどうかを吟味する必要があるということが共通認識として確認されました。

今回の議論を踏まえ、今年8月に予定している第2回セミナーにつなげていきたいと考えます。(文責:友野)



小学校は令和2年度(中学校は令和3年度)から、新しい学習指導要領が全面実施となりました。「道徳の時間」が「道徳科」となってから、小学校は3年目(中学校は2年目)となります。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、総合単元的な道徳学習プログラムの開発を進めてきましたが、新型コロナウイルス感染拡大を受け、検証授業は延期となりました。

そこで、「考え、議論する道徳」への転換の背景には、グローバル化や価値の多様化が存在すると考え、先進的な取り組みを行っているドイツの道徳教育に学ぶことにしました。まず、「宗教科」を代替する「LER科」「倫理科」「実践哲学科」を取り上げ、各科との特徴その授業の方法について概観するとともに、令和2年2月22日・23日に大阪樟蔭女子大学で開催された日独シンポジウム・ワークショップ(「考え、議論する」倫理・道徳教育の可能性と課題—ドイツと日本の事例から考える—)に参加しました。

さらに、令和2年6月9日の日本学術会議哲学委員会の提言(道徳科において「考え、議論する」教育を推進するために)の中で、よりよい道徳教育のための四つの展望の第一に「哲学的思考の導入」があげられていることから、ドイツの「実践哲学科」の取り組みは、今後の日本の道徳教育に対する示唆を得ることができると考えました。

そこで、「ドイツの道徳教科書(5,6年実践哲学科の価値教育)」の訳者でもある東京医療保健大学、栗原麗羅先生に講師をお願いし、令和3年2月6日(土)オンラインによる研修を実施しました。

まず、ドイツの学校で「考え、議論する」授業展開が可能となっている背景には、学校制度の違いがあるということで、日本(単線型学校制度)とドイツ(分岐型学校制度)の教育制度の違いについて学びました。さらに、日本でもドイツでも、導入がすすんでいる「教科横断的な視点」に基づくコンピテンシー志向のカリキュラムの開発について学びました。(文責:黒澤)

東京医療保健大学 2. コンピテンシー志向のカリキュラム

コンピテンシー志向のカリキュラムの開発
ドイツ教育審議会の1974年勧告においてコンピテンシーは、

- ①専門コンピテンシー(Fachkompetenz)
(→ロートの事象コンピテンシーに対応)
- ②人間的なコンピテンシー(humane Kompetenz)
(→ロートの自己コンピテンシーに対応)
- ③社会的・政治的コンピテンシー(gesellschaftlich-politische Kompetenz)
(→ロートの社会コンピテンシーに対応)

の三つの枠組みでとらえられ、生活場面における行為能力(Handlungsfähigkeit)の重要性が強調された。

ロートとドイツ教育審議会の三つ組のコンピテンシー理解が今日のドイツのコンピテンシー議論でも重要な位置を占める。
吉田成章(2019)「コンピテンシー志向のカリキュラム改革と授業づくりの意義と課題」久田教育(監修)PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革 181-194頁 48-49ページ 20

